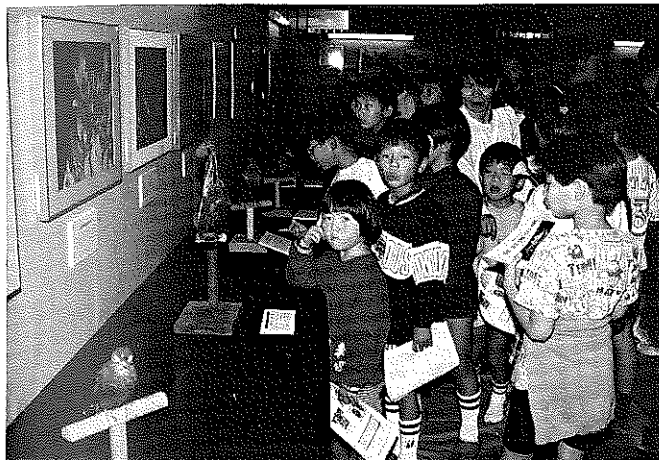


座間味

第18回 移動博物館



沖縄県立博物館では、博物館の利用に不便を感じる地域の方々に、博物館活動の一端にふれていただくため昭和54年度から「移動博物館」を実施してまいりました。平成6年度は第18回目にあたり座間味村の座間味小中学校体育館において、平成6年度12月2日(金)・3日(土)の二日間開催いたしました。展示内容は考古、歴史、自然史、美術工芸、民俗の5分野からなり、総展示数は約300点に上りました。また、文化講座を「沖縄の鯨類」という演題で内田詮三(国営沖縄記念公園水族館 館長)先生を講師に迎え、座間味離島振興総合センターにおいて開催いたしました。その他にも「自然観察会」を髙原建二(沖縄県立博物館指導主事)の指導で、地元の小中学生を対象に実施いたしました。

開会式では、座間味小中学校、阿嘉小中学校、慶留間小中学校の児童生徒全員が参加しそれぞれ3校の児童生徒代表が歓迎の挨拶を行ないました。その中で、慶留間中学校3年生の与儀圭子さんは

「私達がまちに待っていた移動博物館がやって来ました。私達、幼小中学生は近くに博物館がないので、今日の日をくびをながくして待っていました。特に私は鯨の歯形や紅型に興味があります。また、小学校6年生の時に習った、港川人骨を実際に見ることができると聞き、とても楽しみにしています。教科書の写真で見た人骨と、実際の人骨の大きさの違いが確かめられる、よい機会に恵まれたと感謝しています。普段の生活では知ることのできないことを、たくさん吸収して帰りたいと思います。今日は本当にあ

りがとうございました」と、移動博物館に対する期待を述べました。

今回の移動博物館では、地域の方々の協力をいただきながら、期間中508人の入場者があり盛況のうちに閉会いたしました。



特別展「子どもの世界」盛況のうちに終わる



特別展「子どもの世界」は平成6年7月19日(火)から8月31日(木)まで開催され、期間中2万人余の入場者があり、大盛況のうちに終わった。

この特別展では沖縄の子どもにまつわる諸資料を一堂に集め、学校社会ではとらえきれない伝統的な子どもの世界を再現した。

考古資料にみる子ども、歴史資料や絵図・絵画にみえる子ども、祭りや人生儀礼など民俗行事にみる子ども、子どもの衣装、玩具、過去と現代の

遊び、わらべ歌、絵本や漫画にみる子どもの世相写真・映像資料にみる子どもなど様々な視点から子どもの世界を展開した。

この特別展を通して、沖縄地域の伝統的な子どもたちならびに子どもたちをとりまく社会・環境をあらためて考える機会となった。

関連催し物として絵本の読み聞かせが県子どもの本研究会のメンバーによって行なわれ、他の団体の協力で、昔語りと手あそび・素人話し、人形劇、紙芝居などがあり、どの企画も子どもたちでいっぱいであった。

ロビーにおいては友の会による昔懐かしい「いっせんまちやぐあー」がもうけられ、駄菓子や玩具などが並べてあり、店の前は子どもや昔を懐しむ大人とでにぎわっていた。

また関連行事として特別文化講座に青柳まちこ氏(立教大学教授)を講師にむかえ、アジア・太平洋地域の子どもの遊びについて講演していただいた。



文化講座下半期の報告

第242回 「山原の海神祭(ウングミ)」(10月15日)

講師：桃原 茂夫(県教育庁文化課)

ビデオ映像を用いて、旧暦7月に山原各地で行なわれる海神祭行事の現状を紹介した。

第243回 「野鳥に親しむ」(11月19日)

講師：嵩原 建二・久貝 勝盛(県立博物館)

身近な自然に親しむ方法の一つとして、県内最大の干潟である漫湖に渡来してくる野鳥を観察した。当日は多数の方が参加して、望遠鏡や双眼鏡を手に熱心に観察していた。

第244回 「鉄器の話」(12月17日)

講師：大城 慧(県教育庁文化課)

沖縄における鉄器文化の展開について、実際に新発見の考古資料を使って紹介した。

第245回 「歴史の道を歩く」(1月21日)

講師：萩尾 俊章(県立博物館)

当日は天候にも恵まれ、多数の参加者とともに約3時間にわたって、首里に残る歴史の道、末吉宮参詣道を中心に歩きながら、歴史の追体験を行なった。

第246回 「東南アジアの漆文化」(2月18日)

講師：宮里 正子(浦添市美術館)

ミャンマーの漆芸と人々の暮らしをミャンマーの調査から帰ってきたばかりの宮里先生がその調査結果をスライドや現物を使って紹介した。

第247回 「塩の文化」(3月18日)

講師：金城 透(県教育庁文化課)

古代から使用され現在でも生活必需品である塩について塩づくりの歴史を追いながら学習した。

第8回 博物館シアター「ミュージアムコンサート」

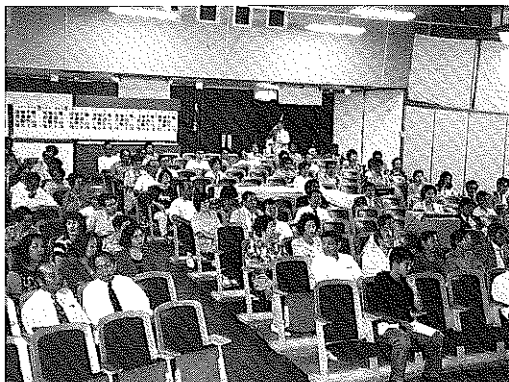
演奏「音のアトリエ」

沖縄県立博物館では、平成6年度より新規事業として、博物館シアターを実施しております。博物館シアターは県民の皆さんが博物館に気軽に足を運び、博物館を利用し楽しんでいただくために企画されたもので平成6年4月に行なわれた、第1回のシアターから平成7年2月に行なわれた第11回のシアターまでの入場者数は1,277名に達しました。

去った12月に行なわれた、第8回博物館シアターでは、ミュージアムコンサートというタイトルで、グループ「音のアトリエ」でコンサート活動をしておられる、県立芸術大学非常勤講師の山田一、佐渡山真理、竹内元子、大城真紀の、四氏の四重奏によるクリスマス・コンサートを実施いたしました。

今回のミュージアムコンサートでは、103名の

参加者があり、盛況のうちに閉会いたしました。これまで県立博物館では、本格的なコンサートが開かれたことがなく、コンサート終了後、多くの参加者から「有意義なコンサートであった」との声が聞かれました。



アメリカ出張報告

平成7年度は太平洋戦争・沖縄終結50周年にあたり、県立博物館では特別展「魅る沖縄・戦災文化財と戦後生活資料展」を企画し、開催に向けての準備作業を今年度から行なっています。

去った6月には、米国のハワイ・ロス市にて流出文化財調査が行なわれました。それを受けて11月25日～12月6日までの12日間、萩尾と與那嶺が2名のカメラマンを同行して、特別展で展示予定している資料の借用交渉および写真撮影の旅に

出かけました。

ハワイ州、ロス州においては、それぞれの沖縄県人会の暖かい歓迎を受けました。そこでは、ウチナー方言が語られ琉球民謡が流れ、沖縄と陸続きであるかのような錯覚を感じました。

ハワイ州マウイ沖縄県人会、ハワイ沖縄県人会、ホノルル美術館、ピショップ博物館、ロス市のロスアンジェルス郡美術館、北米県人会等と資料の借用交渉が行なわれ、それと平行する形で、マウイ沖縄センター、ハワイ沖縄センター、与那嶺氏宅、ロス市の北米沖縄県人会の4ヵ所、写真撮影を終日行ないました。短い口程で形態の違う資料の写真を撮るため撮影場所や撮影時間などで、ご迷惑をおかけしたこともありましたが、県人会の皆様のご協力のおかげでスムーズに進行することができました。

また、前回の調査では確認できなかった戦前および終戦直後の沖縄の写真や移民関係資料などが、新たに見つかりました。

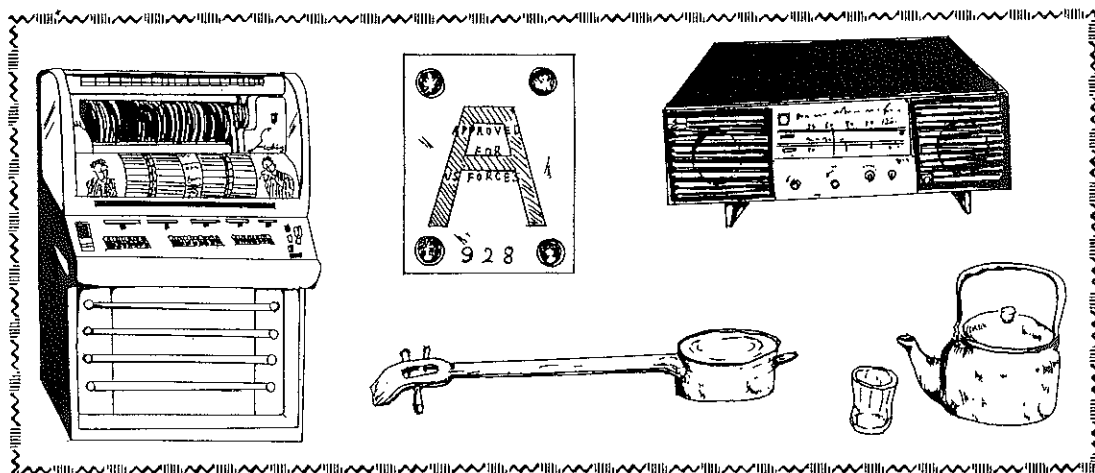


「甦る沖縄・戦災文化財と戦後生活資料展」(仮称)

に向けての資料収集

沖縄県立博物館では、沖縄戦終結50周年を記念して平成7年(1995)6月に特別展「甦る沖縄・戦災文化財と戦後生活資料展」(仮称)を開催します。戦争の惨禍は文化財の破壊と散逸の実状をとおして伝えることがねらいです。廃墟の中から立ち上がって、生活の再建、郷土文化の復興、文化財の収集・保存・復元に取り組んできた県民の努力の足跡をたどることによって、平和創造の精神をアピールします。このような特別展開催のた

め準備作業にとりかかっていますが、とくに沖縄戦や戦後の生活資料が少なく収集に努めているところです。もし、皆さんのところに日の丸寄せ書き、カンカラサンシン、米国民政府発行パスポート、ジュラルミン製食器、ジュークボックス、730標識、復帰運動に関する資料(寄せ書き、横断幕)米軍毛布やパラシュートを利用した服、洗濯板、USカバン、水カン、など何でも結構ですので、ございましたら博物館まで御一報下さい。



連絡先：沖縄県立博物館(学芸課：萩尾・與那嶺まで) ☎ (098)884-2243

沖縄県博物館協会秋期研修会(名護)

平成6年11月10日(木)～11日(金)の日程で沖博協秋期研修会が名護で行なわれました。

開会に先立ち名護博物館で理事会が行なわれ、日程等の確認が行なわれました。場所をオリオンビール研修ホールに移し、13:00～13:45受付後まず、来年度の博物館実習について、琉球大学法文学部の池田栄史助教授から各館へ協力お願いがありました。

次の講演は海洋博記念公園水族館館長の内田詮三氏の「沖縄の鯨類」で、スライドをふんだんに

使い興味深い内容でした。次に「社会教育小話」のテーマでいしなぐ授産所の比嘉太英氏の講演が行なわれ、長年の教育経験からくるウィットに富んだお話で聴衆を引きつけておられました。

懇親会はオリオンビールゲストホールで行なわれ、専用の紺の上着に着替えた司会の宮里至名護博物館館長は大張り切りで、なごやかな楽しい懇親会でした。

翌日11日は、大園林道・沖縄貝類標本館・宜野座村立博物館等を見学しました。

トカラ調査随想録

～口之島で野性牛と対決～

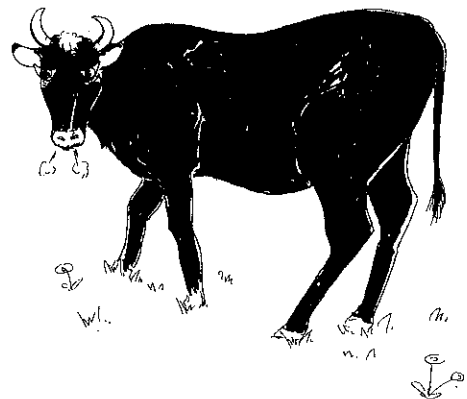
道をトコトコ歩きながら何度も汗を拭いた。早朝6時頃から歩きづくめだ。「たしか、この近くに温泉があるはずだ。帰りの船は夕方6時30分今、4時だ。まだ時間はある。天然の温泉にでもつかって身体を休めよう」。曲がりくねった坂道を下っていくと、やっとそれらしい赤い屋根の建物が見えた。しかし、入り口には鍵がしっかりとかかっている。地元の人達しか利用できないようだ。男はうらめしそりに建物の周辺をウロウロした後、近くの石垣に腰をおろした。リュックからミカンを取りだし、ゆっくりと皮をむいた。と、その時大きな黒い牛が山道をふさぐようなかっこうで現われた。地元の人達から「山中には、たちの悪い野性牛がいて、時には林道をふさぎ、人に悪さもする。気をつけた方がいい」と言われた事が現実のものとなった。

角は長くて鋭い。おまけに恐ろしい形相をしている。男と顔を見合わせるとギョロリと意地悪そうな目を向ける。時々、殺気だった目付きで耳をピクピクさせている。まともなぶつかったら勝ち目がない。しかもここは人影のまったくないトカラの山の中だ不安がよぎる。仕方ない。相手が林の中に引き返すのを待とう。いたずらに相手を興奮させたら危険だ。ひとまず草むらに身を潜めて相手の様子を見よう。

時は刻一刻と過ぎていく。このままでは船に乗り遅れる。さりとて、このアウトローの近くを通るのは危険きわまりない。おちつけ、おちつけ。相手に移動してもらい以外にこのピンチを脱する

方法はないのだ。あせる心を抑えて待つこと1時間。やっと動きだした。しかし、この御仁、あきらめが悪い。林の中に出たり入ったりしている。とうとう、むっちりした上半身の大半を道端の林の中に隠し、汚れたお尻だけがチョコット見える時がきた。よし、今だ。運を天に任せるしかない。男は野性牛と顔を合わせないようにして、ソロソロと側を通り抜けた。今にも、後方から鋭い角がせまってくるようで背中が寒い。冷汗がジワーッと出る。やっと通り抜けた時は思わずフーッと大きなため息が出た。

かろうじて間に合った帰りの船の中で、諏訪之瀬島に行ったSという男とお互いの無事を喜びあった。彼も突風に煽られて噴火口に落ちそうになったらしい。翌日の晩、男二人は持参した久米仙で乾杯した。日頃、いい事ばかりしている我々が神が見捨てるわけがない。彼らは互いにそう思っていた。



<p>博物館案内</p> <p>MUSEUM 県立博物館 首里城公園前 首里高校 RYUTAN FOND 当蔵 鳥居 石畳道</p>	<p>【交通案内】</p> <p>一那覇空港発一 ⑦番(首里城公園行き)「首里高校前」バス停下車、徒歩5分</p> <p>一市内バス一 ①番(首里識名線) ②番(末吉線) ③番(牧志線) ⑦番(石嶺間南線) 上記の路線は「首里城公園入口」または「当蔵」バス停下車徒歩2分。</p> <p>一市外バス一 ⑩番(西原線)の「首里城公園入口」または「当蔵」バス停下車、徒歩2分。 ⑤番(石川線)、⑨番(琉大線)の「桃原」バス停下車、徒歩5分。</p>	<p>沖縄県立博物館だより No.37</p> <p>発行年月日：平成7年3月27日 編集・発行：沖縄県立博物館 住 所：〒903 那覇市首里大町1-1 ☎098-884-2243 FAX 098-886-4353</p>
--	--	---